すずらん

吉田　三夫

朝、五時から、荷物を地域ごとにまとめる振り分け作業をする。それからトラックに乗る。運転免許を持っていてもアルバイトなので運転はさせて貰えない。街中を車の後をついて走りまわって配達する。午後二時に仕事が終わる。くたくただ。

五頭慶介はこの五月で四十二歳になる独身男。宅配会社のアルバイトの帰り道。自転車は、車一台やっと通れるほどの緩やかな坂を登っている。右側の町工場のコンクリート塀の中ほどに女の子がうずくまっていた。木の実でも拾っているのだろう、と思った。近づきながら観察してみると苦しそうに、お腹を抱えている。自転車を止めて

「どうかしたの?」

小学校の低学年らしい。

「お腹がいたいの」

泣き顔だった。

「家はちかいの、家に誰かいるでしょう」

自転車から降りた。

「ちかい、でも誰もいない」

苦痛のためか声をふりしぼっているようだ。

少女を抱きかかえて、自転車の荷台に乗せる。思ったよりも軽かった。

「お医者さんのところに行こう、おじさんの身体にしがみついていなさい、落ちるとケガをするからね」

慶介の頭の中にはこの地域の病院の場所は全て入っていた。一番ちかいかかりつけの小児科を併設している内科医院に自転車を走らせた。この医院の午後の診察は三時から。まだ二時半である。玄関は開いていたので少女を背負って、飛び込んだ。受付に人はいなかった。

「急患です。お願いします」

大声で数度くりかえす。

「診察はまだですよ」

看護師が出てきた。
顔見知りであった。事情を説明して、無理を承知で懇願した。
「至急、診察してください」
看護師は医者に伝えた。
診察待ちのお年寄りが数人いたが、医者は診察に応じてくれた。問診の後、彼女を診察台に寝かせ、聴診器を腹にあてながら、
「胃炎のようだ。薬を出しておこう。食べ物は柔らかいものがいい。はい、次の患者さんのTさん、診察室に入ってください」
医者はそのまま午後の診察に入った。
慶介はこの医者に子どもの頃から診てもらっている。
医院の玄関をでる頃には女の子の腹痛は少し治まっているようだった。苦痛に顔をゆがめることはなかった。
医院の脇の薬局で薬を受け取り、これからこの子をどうしょうか、と思案した。
「帰っても家には誰もいないと言ったね。何時ごろ帰ってくるのかな。おじさんはこの近くだから、帰ってくるまで、おじさんの家にいるかい」
このまま誰もいない家に帰すことはできない。
「七時頃にお母さんが帰って来るの」
あと四時間はある。
「お父さんはもっと遅いのかな」
少女を自転車の荷台に乗せた。
「お父さんはいないの」
うつむいて小さな声を出した。
「悪いことを聞いてしまったね。さあ、おじさんの家にいこう」
自転車で自分の家に向った。

慶介は大学卒業後、大手電気企業のグループの一つであるＩＴ会社に就職した。順風満帆の社会人になったはずだった。仕事は、他社大手企業の仕事の内容を正確、精緻に把握してそれをソフト化することだった。その会社独自のソフトを製作することだった。そのソフトで大手企業は事務の効率化と人件費の抑制を図った。
顧客との会議は深夜に及ぶことが度々である。プログラムを組む部署との会議もあ

る。契約上の納期もある。ソフトの試行もある。顧客は常に複数社あった。終電車で帰宅し始発で出勤するような日々が続いた。日曜祭日も出勤のことがあった。会社は全国に支店をもっていて、大阪、名古屋、仙台支店の応援の仕事があった。それらの支店への日帰りの出張も珍しくなかった。

会社は残業時間に制限を持たせ、それを越える社員に健康診断を義務づけたが、慶介は残業時間を少なく申告して仕事に熱中した。正社員でいるには仕事をこなし結果を優先するしかない。大学時代の仲間が正社員から転落して再び正社員になれないで派遣社員としてもがき苦しんでいるのを知っていたからだ。

突然、朝、身体がだるくなり起きるのが辛くなった。そんな朝が一週間も続いた。遅刻であった。仕事に穴をあけ、上司から叱責を受けた。五日ほど有給休暇をとって静養した。静養中は朝、起きられた。出勤の朝、また起きられなくなった。遅刻覚悟で母が作ったベーコン・エッグとトースト、野菜サラタを食べようとしたら吐き気がして食事が摂れない。朝食抜きで出勤した。吐き気はおさまらなかった。次の日の朝も起きられなかった。やはり遅刻覚悟で、朝食の食卓についた。少し吐き気がしたが、無理にトーストを口に押し込んだ。玄関を出ようとしたら、腹痛である。トイレに駆け込んだ。下痢である。それでも出勤しようと駅に向かい電車に飛び乗った。また腹痛である。途中下車してトイレに駆け込んだ。仕事を休まざるを得なかった。こんな日が毎日続いた。電車に乗ると腹痛である。電車が怖くなった。医者に診てもらった。体はどこも悪い所は無いという。

「真面目な性格で、仕事をうまくやりたい、休みたくない、という気持ちが強すぎる。起きられなかったら、吐き気がしたら、下痢をしたらどうしょう、とそればかりを考えている。不安によって潜在意識がそういう症状を作り出している。今はそういう症状が必要だと潜在意識が判断しているんだろう。仕事を休むこと受け入れなさい、ということだ」

仕事をバリバリしたいのだが、こんなことがふた月も続いて、会社の同僚や上司の信用を失ってしまった。出社したら仕事がうまくこなせるかが、人間関係がなめらかにいくかどうかが、こんどは心配になってきた。不安の循環に陥った。これを断ち切らなければならない。

「会社を辞めたい」

うつろなまなこで肩を落とし、ソファーに腰かけている父母の顔を見上げた。

「もっと、会社を休んで静養すればいいんじゃないか。社会はそんなに甘くはないぞ。今の世の中、再び正社員の道は厳しいからな。辞めることはない」

父のいうことは、慶介にも分かっていたからこれまで頑張ってきたのである。だが、今の心の状態では無理なのだ。

「あなた、何を言っているの。これまでのこの子の様子をみて分かっているでしょう。人生に健康が必要なのよ。会社なんかどうにでもなるでしょう。慶介、辞めていいよ。仕事が見つからなければ、家で遊んでいていいから」

母の言葉はありがたかった。先祖から受けついた土地二百坪に五ＬＤＫの家が建っている。父は大手総合商社の課長であり、母は活花の先生をしていてお弟子が二十人もいた。経済的には、一人っ子である慶介くらいの生活の面倒を見る余裕はたっぷりあった。

仕事を辞めて、半年ほど家にいて、人生なんかどうにでもなれ、という気持ちになって、心身は回復した。就職活動に専念したが、三十歳近い男に正社員の仕事は見つからなかった。かくしてパラサイト・シングルにならざるを得なかった。

これまでの非正規の仕事の数は思い出せないほどあった。ビルの清掃員、コンビニの店員、スーパーの品だし、チョコレート会社の荷役、街頭でのチラシ配り、警備員、トラックのターミナルの荷役作業、建築会社の土木作業、新聞配達、メッキ工場のメッキする前の品物の埃やサビを落とす作業、探偵事務所の使い走り、飲食店の皿洗い、居酒屋でのヤキトリ焼き、酒屋の配達、介護の補助、水道の配管などであった。

母は五年前、乳がんで六十五歳の時に亡くなった。四年にわたる闘病の末だった。慶介は、母の最後の一年間はアルバイトをせずに家事をこなして看護した。仕事を辞めてパラサイト・シングルでいられたのは母の優しさがあったからだ。

母の病気に関して父は一切なにもやらなかった。仕事一筋で取締役まで出世した彼は慶介に対しても母に対してもそして他人に対しても命令口調だった。会社を引退したのは六十五歳で今から七年前である。母が亡くなってからは酒量が増えた。悲しみを顔にださなかったが、精魂は悲しみで一杯だったのだろう。現役の商社の取締役だったから、顔にだせなかったのかもしれない。

これといった趣味を持たない父は引退後に囲碁、将棋の世界に顔をだしたが、命令口調で対人関係がうまくいかず、長続きしなかった。更に、ウォーキング、川のゴミ拾いのボランティア、野生植物観察会などにも参加したが、長続きしなかった。

しかし、食べられる花の植物の栽培は長続きしている。他人と接触しないで済むからだ。このことはテレビで知ったらしい。

日本には古くから菊の花や菜の花などを食べる習慣がある。また、桜湯など、花弁を塩漬けにしたものもある。花を食べる西洋文化が二十世紀後半に日本に入ってきた。所謂エディブルフラワーと呼ばれているものだ。食べられる花には、ベゴニア、ニチニチソウ、パンジーなどがあり、その数は数十種類に及ぶ。父はこれらの植物の栽培を自宅の庭で始めた。勿論、料理の出来ない父は生野菜と混ぜて食べるために、無農薬での栽培である。

物忘れがあり、酒をよく飲むのでアルコールによるものかなと思っていた。最近それがひどい。昨日のこととか、午前中のことを忘れてしまっていることがある。それなのに何十年前のことはよく覚えているのだ。

先月の月曜日に仕事が休みだったので、父を病院に連れて行った。脳の磁気共鳴画像装置（ＭＲＩ）による検査、認知機能テストなどを受けた。少し進んだ認知症ということで、様子をみてほしいとのことだった。

また、父には不整脈という心臓病があった。定期的に診察を受けているが、今のところは大丈夫らしい。

二台分ある駐車場に車はない。父の様子を見て車は乗せない方がいいと判断し、廃車処分にしてしまった。本当はスポーツカーを一台のこしたかったのだが、父が乗るだろうと思い諦めた。父が事故で死ぬのはいいが、他人を殺しては後味が悪い、

自転車を駐車場に止めて少女を抱いておろした。門扉を開けて玄関に向うと

「おーい、慶介、その子はどうした？」

父の声がした。庭の奥の方で栽培植物の草むしりをしていた彼は、立ち上がって背伸びするように腰に手をあてた。

いきさつを説明すると

「そうかい、お嬢ちゃん、お母さんが帰ってくるまでいるといい」

再び腰をおろして草むしりを始めた。

応接間のソファーに寝かせて、毛布をかけて聞いた。

「お母さんと連絡を取りたいんだけど、どこにいるのかな」

「Ｍスーパーのお花屋さん」

「ああ、そこならおじさんも買い物に行くから知っているよ。名前は」
「私は小島智子。小学校二年生。お母さんは小島里子」
はっきはりした口調だった。どうやら、少しずつ痛みは和らいでいるようで顔色も良くなっている。
慶介は応接間のゴミ箱をあさった。数日前にMスーパーで買い物をした。そのレシートには電話番号が書いてある。しわくちゃのそれがみつかった。Mスーパーに電話して花屋の小島さんに連絡をとって貰った。事情を説明すると彼女は驚いた声で、仕事を早めに仕舞い引き取りに行きます、と言う。自宅の場所を丁寧に教えた。
草むしりを終えた父が応接間にやってきて
「おーい、慶介、その子はどうした?」
苛立ったが同じ説明をした。
「そうかい、分かったよ。しかし、なんだな、慶介は昔、ITの会社を辞めてしまったんだな。今はアルバイトかい、昼間から家にいて情けないな」
父の面倒をみているのは慶介である。朝、四時に起きて、朝食と昼食を父のために作り、それからアルバイトに出かけている。怒ろうかと思ったが、我慢した。
父は自分の部屋に入った。
その時、チャイムの音が聞こえた。智子の母が迎えにきたのだろう。
「すみません、ご迷惑をおかけして」
扉を開けると、髪が長く、鼻筋が通り、唇が厚い三十代前半の女性が立っている。身長は百六十センチ位だろう。ちなみに慶介は百八十センチある。急いで来たのか息を切らしている。黒いジーンズにピンクのブラウスだ。
「お気にしないでください。お子さんを連れてきます」
応接間から智子の手を引いてくる。
「おかあさん」
智子は母に抱きついた。
「お住まいはどちらでしょうか」
「この近くのKアパートです」
「あそこなら知っています。自転車ですが、送りましょう。背負って帰るのは大変でしょうから」
「そこまでご迷惑はかけられません」

「いいんですよ。暇をもて余しているのですから」
慶介は智子を自転車に乗せて、母親と一緒にKアパートに向った。歩いて二十分ほどのところにあった。二階建てで、全部で二十部屋くらいのアパートである。まわりには低木のカナメモチが植栽されていた。鉄でできた外階段を昇り、二階の真ん中が小島親子の部屋だった。　智子を背負って部屋の鍵をあけながら里子は
「コーヒでも飲んでいって下さい」
慶介は招きいれられた。
玄関を入って左側に一畳ほどの台所があり、正面は四畳半の和室だった。和室の奥にもうひとつ部屋があった。里子はその部屋に智子を寝かせて、慶介がいる和室に戻ってきた。台所に立ち、コーヒを淹れて座卓の上に置いた。
「お世話になりありがとうございました。召し上がってください」
畳に両手をついて恭しく頭を下げた。
「たいしたことはしていません。この医院はここから近いので安心です。様子をみて調子が悪くなったら再度、診察を受けてください。」
慶介は、コーヒをすすりながら、薬と診察券を渡した。
「すみません、引越をしてきたたばかりで医院の場所がわかりません」
「紙と鉛筆はありますか」
アパートを中心に医院までの行き方を書き、座卓の上に置いた。
「分からないことがあったら聞いてください」
「分かるとおもいます。これだけくわしい地図ですから」
地図をみつめて答える。
「それはよかった。失礼なこといいますが、旦那さんはいないと、お嬢さんから聞きました。なにか困ったことがありましたら、わたしは土地の者でこの辺のことはよく知っていますので、携帯の番号を地図に書いておきますから、連絡してください」
地図を手元に引き寄せて記入した。
「ありがとうございます。心強くなります」
里子は、地図を二つに折りながら頭をさげた。
「知らない土地での生活は大変だと思いますが、頑張って下さい。これで失礼します」

コーヒを呑み終えた慶介は立ち上がってドアに手をかけた。
「おじちゃん、どうもありがとう」
奥の部屋から智子の声がした。
「お大事に」
部屋を出て、階段を降りると軽々と自転車に飛び乗った。

仕事から帰宅して応接間のソファーに横たわっていた。陽光は斜めに弱弱しく応接間に届きすがすがしい。仕事からの開放感もあるだろう。
父は庭で食用植物の水遣りをしている。午後二時半である。水遣りは本当はもっと夕方のほうがいいのだろう、と思いながら父には黙っていた。彼は人の言うことは聞かないで、注意されると、ときによっては怒りだすのだ。
携帯が鳴った。
「もしもし、里子です。昨日はありがとうございました。あわてていて娘の医療費をお支払するのを忘れていました。今晩、お宅に伺ってよろしいでしょうか」
気おくれしたような口調だった。
「そうでしたね。どうぞ、いいですよ」
医療費のことは忘れてしまっていたのではない。言い出せなかった。。
「何時ごろ伺ったらよろしいでしょうか」
「仕事が終わって家に着くが午後二時半、それからはずうっと家にいるんです。それ以後なら何時に来て頂いてもいいんですよ」
「それでは仕事が終わったら伺います。では失礼します」
そういって携帯は切れた。

午後六時半、父はサルビアとラベンダーの花を混ぜた野菜サラダを食べながら、焼酎を飲んでいる。この料理だけは父が作り、慶介には食べさせない。彼の人生の最後の趣味であり、生きがいである。慶介の夕食は生姜焼きである。
チャイムが鳴った。里子だろうと瞬間に思った。受話器をとらずに玄関に走り、ドアを開いた。
「いらっしゃい、待っていました。仕事の帰りですか」
食事中だったので、ご飯が口の中に残っていて、それを飲み込みながらの言葉だ。

「済みませんでした。お幾らでしょうか」
バックから財布をとりだす。
「ちょっと待っていて下さい。領収書を取ってきますから」
応接間に行き、領収書を手にして戻ってきて手渡した。
里子はその金額を財布から取り出して、どうもありがとうございました、と慶介の掌に載せた。
帰ろうとする背中に
「どうですか、お嬢さんの具合は」
慶介は言葉を投げかけた。
にっこりした里子は踵をかえした。
「良くなっているようなのですか、気持ち悪い感じは取れていないようなのです」
表情に少しかげりがでた。
「様子をみて良くならないようなら大きな病院で診て貰いましょう。案内しますからその時は遠慮しないで言ってください」
慶介は、市内にある総合病院をいくつか頭に浮かべながら笑顔を作った。
「その時はお願いします。そう言って下さると安心します」
口元を緩めて言葉を続けた。
「では失礼します」
扉を開いたまま、門扉に向って歩いていく里子の背中に無言で手を振った。

仕事を終えた慶介はいつものように応接間のソファーに寝転んでいた。里子が医療費を払いにきてから、一週間たっていた。
携帯が鳴った。里子からで、智子の具合がよくならないので大きな病院を教えて欲しい、ということだった。医者に紹介状を書いて戴いて、慶介は親子を市民病院に案内した。
病院は、この町の駅から南に私鉄で二つ目の駅で降りて、バスで十分ほどの所にある。最近、建て替えられた七階建ての病院である。小児科で診察して頂いた。胃潰瘍の可能性があるから内視鏡検査をすることになり、予約を取った。
診察を終えて駅に着いたら午後一時を回っている。
「お腹が空いたよね、昼食でも食べようかな。智子ちゃんはお腹の具合が良くない

からうどんがいいだろう」
慶介は智子の手を引いて駅ビルの八階にある食堂にエレベータで向った。
智子は月見うどん、慶介と里子は親子丼を食べる。智子は半分しか食べなかった。
慶介が支払を済ませて、三人が店を出ようとしたとき
「旦那さん、忘れ物ですよ」
振り返ると、太った五十代の女性店員が手に慶介の小さなバッグを持っていた。
旦那と言われて慶介はうろたえて、無言でいると、
「すみませんね」
里子がバッグを受け取った。
智子が、くすっと、笑った。

十日後の智子の内視鏡検査結果は胃潰瘍であった。入院することになった。里子は仕事の合間に智子の下着類などを買い求めた。入院当日の手続きは慶介が同行して行なった。　手続きを終えて病室へ向かおうとしたとき、智子は不安げな表情で
「お母さんは仕事で見舞いに来られないので、おじちゃん、来てくれる。午後二時半からは暇なんでしょう」
慶介の手を握って少し涙ぐんだ。
「智ちゃんのためなら毎日でも見舞いに来るから安心しなさい。お見舞は何がいいかな。食べ物かな、いや食べ物はダメだろう。花なんかがいいかな」
優しく手を握り返して、智子の目線までかがみこんだ。
「チョコレートがいいよ」
安心したのか、少し、元気な声が返ってきた。
「お医者さんに聞いていいって言ったらもってこよう」
看護師の案内で五階の五〇五室に入った。ベッドは入口に一番近い左側で六人部屋だ。ナースステーションからは幾分離れている。
帰りのバスで駅に着いたのは午後一時を回っていた。慶介は里子を誘い、この前の駅ビルのうどん店に入った。カツ丼を頼むと、この前、バッグの忘れ物を教えてくれた女性店員が、二人を覚えていたらしく
「今日はお嬢ちゃんは学校ですか、それにしても仲のいいご夫婦でなによりですね」

愛想わらいをして言葉をかけてきた。慶介は黙っていた。
「どうもありがとうございます」
里子も愛想わらいしながら返答した。
その夜、里子のアパートの部屋で二人は男女関係を持った。

里子は自分のことを話した。半年前に離婚した。夫は下町の鉄工所の溶接工で腕がよかった。しかし不景気続きで中小企業はどんどん倒産していた。夫の会社も例外ではなかった。職探しに奔走した。ハロー・ワークは元より友人、知人、会社の上司などに職の紹介を頼んだ。高校や大学の新卒者でも職がない時代である。職はみつからなかった。当初は雇用保険で食いつないでいたが、その期間もすぎた。里子は中華食堂の皿洗いのアルバイトをした。夫は職がみつからないので、自暴自棄になり酒を呑むようになり、そのうちに朝から酒浸りになり、職を探さなくなった。里子は文句もいわずに朝刊を配るアルバイトもした。ここまでなら、里子は許せた。しかし、夫は呑んで暴力を振るうようになったのである。最初は里子にだけ暴力を振るっていたが、智子にも振るうようになった。あまりにもひどい暴力に耐えられず、離婚して、この町に逃げてきた。
話を終えた里子は慶介に詰問する。
「あなた、暴力は酒呑んでも振るわない」
「オレ、酒呑まないよ、暴力はこれまでに振るったことはない」
「前の夫をなんども包丁で殺そうと思った。酒を呑まないとおとなしいの。それで、酒が入っていないときに包丁を突きつけて『殺す』と脅して、離婚届に印をおさせたのよ。暴力は決して許さない」
下着をつけ終えてジーンズを履いている里子の目付きは厳しかった。
「わかったよ。暴力は絶対にしないから安心していいよ」
慶介もパンツを履き、ズボンに右足を入れる。
「智子は夜、眠っている時にうなされるの。前の夫の暴力からまだ開放されていないのよ。胃潰瘍もそのストレスが原因だと思うわ、前の夫を殺してやればよかった」
衣服を身にまとった里子はいまいましげにジーンズのベルトをしめた。
「殺すか？　本気ではないが、父を殺そうと思ったことがあったよ。アルバイトを繰り返すオレに辛くあたるんだよ。一番最初のＩＴ会社をなぜ辞めたのか、父のい

うことを聞いて辞めなかったら、アルバイトなんかしないで済んだはずだ、会社を辞めたのが転落の始まりだ、と。今でもそうなんだ」

服を着終わった慶介は布団を畳んだ。

「そういう気持ち分かるわよ。おとうさんも暴力は振るわないんでしょう」

畳の上に座った里子は慶介に鋭い視線を送った。

「父も暴力は振るわないよ」

「安心した。経済的にはお父さんに頼っているの」

「そうでもないよ。父の預金をキャシュカードで勝手に引き下ろすことはできるが、それは本当に困った時にしかやらない。できるだけ自分のアルバイト代で生活するようにしている。貯金もしているよ。父が死ねば、家、土地、有価証券、預金など相当の遺産がオレに入ってくる」

「いい身分ね、余裕があって。私なんか大変なんだから」

こんどは目を伏し肩を落とす仕草をした。

「大体、想像がつくよ。女一人で子どもを育てることがいかに経済的に苦労が多いかってことは。これまでのアルバイトでたくさんのそういう人をみてきているから」

慶介も目を伏し、同情的な口調にならざるを得なかった。父と母のことを含めて過去の自分のことを話した。父が現在、認知症で心臓病を患っていること、死ぬのであれば心臓病だろうと思っていること、唯一の趣味は食べられる花を栽培して食べていることなどを付け加えた。

「ああ、それで庭にあんなに花が咲いているの、あなたが花好きで栽培しているのかなと、思っていたわ」

里子は納得した様子で

「私も花屋で働いているから少しは花には詳しいのよ。でも毒草もあるから気をつけないとね。認知症なんだから」

少し自慢する口調で言葉を継いだ。

智子の症状は回復し、退院することになった。入院費用が払えないので慶介は借金を申し込まれた。快く了承し自分の貯金で算段した。

智子は学校に通い始めた。慶介も里子もアルバイトに精をだしていた。里子は仕事が休みの日の午後に慶介の家に遊びにくるようになった。時には智子も一緒である。

そんな時、慶介は父が自室にいるように勧めた。父を除いては家族ぐるみの交際が始まったのだ。
里子が仕事で慶介が休みの日曜日に慶介は、智子を連れて遊園地に行った。二人はジェットコースターに乗り歓声をあげ、大観覧車で町並みを遠望した。
智子は多いにはしゃぎ喜んだ。

慶介と里子は近い将来に結婚する約束を交わした。その実現のために二人は力をあわせて働き半年が過ぎた。

五月晴れの午後、仕事を終えた慶介は家のソファーで休んでいた。里子からの着信音が鳴った。
「私、仕事辞めた」
泣き声だった。
「悔しくて、悔しくて」
と続けた。
「どうして辞めたの」
穏やかな声音で聞いた。里子は返事が出来ないらしい。
「今どこにいるの？アパート。それならすぐにそちらにいくから待っていて」
運動靴を履き、玄関から門扉まで走り、自転車に飛び乗りアパートに向った。
部屋で里子は泣いていた。しずかな口調で、辞めた理由を尋ねた。
花屋の売り上げの現金と帳簿が合わなく、現金が少なかった。チーフに盗ったのではないか、と詰問された。
「最初から盗ったって、そういう聞き方はないでしょう。そんな目で見られていたのならこんな仕事、今すぐに辞めます。私は絶対に盗っていません」
その場で店を飛び出し真っ直ぐにアパートに帰ってきてしまった。
辞めてしまったら余計に怪しまれるのではないか、と思ったが、そのことは口には出さずに
「戻る気はないの」
冷静に聞いた。
「ある訳ないでしょう」

怒りに満ちた口調で言葉を荒げて続ける。
「でも、生活が成り立たないの。わずかな預金はあるけれど、すぐに職を探さないと生活ができない。アパート代も滞納すると、大家から『出ていってくれ』と言われるわ。ほんとうに頭が痛い」
里子は両耳に手をあて頭を振った。
慶介はこれからの生活に不安を持つのは当然だと思った。職を探すと言ってもすぐにはこの時代にみつからないだろう。住む所もなくなると言うのだ。里子も不憫だが、智子はもっと不憫である。自分に出来ることはただひとつだ。
「結婚の約束をしているんだから、いずれはオレの家に住むことになるんだ。それが少し早まったと考えて、オレの家に引っ越してきてはどうだろう。住む所を確保してから職を探せばいいだろう」
覚悟をきめた言葉である。
「お父さんはどう言うでしょう」
里子は不安の表情で聞いてきた。
「緊急避難的方法だ。父の了解をとっていてはいつになるか分からない。それに父は認知症だから埒が明かないだろう。かえって君に世話などで迷惑をかけるかも知れない」
「本当にいいの」
里子は不安の中に喜びを表出する眼差しで聞いてきた。
「いいも悪いもそれしか解決策がないじゃないか。楽観的な見方で行こう、早いことにしたことはない。引越しは今度のオレの仕事が休みの日でいいだろう、それでいいかい」
携帯を手にして里子の都合を聞いた。
「いつでもいいわ、智子の学校が変わる訳でもないし」
「引越しで是非持って行きたいものって何がある?思い出の品など」
運送会社の番号をプッシュしながら尋ねた。
「テレビ、私がローンで買ったもの、それに洋服ダンス、これは結婚の時に両親にプレゼントされたもの」
運送会社の社員と日時と運ぶ家裁道具の量の話しをして金額が折り合ったので、その会社に引っ越しを決めてしまった。

「残った家財道具は不要物品回収業者に引き取ってもらうから、それでいいね」
家に帰ると庭で食用植物の草むしりをしていた父に、里子とのこれまでのいきさつを話して
「結婚する相手が困っているので、今度の木曜日に親子が引っ越してくるからよろしく」
草むしりを手伝った。
「ああ、そうかい、好きなように」
父が意外にあっささりと受け入れてくれたので、慶介はかえって気が抜けてしまった。

木曜日、トラックが門扉の前に停まった。荷物といっても洋服ダンス、テレビ、洋服類を詰めたダンボール五個だけである。運送会社の人が家に運び入れようとした時、父が庭から飛んできて
「おい、慶介、なにをやろうとしている」
不審な顔で聞いてきた。
「この前に話しをしただろう。オレが結婚する人の引越しだよ。今日からこの家で一緒に住むんだよ」
少し腹が立った。親子を父に会わせて紹介し、ことの経過を再度、説明した。
「そうかい、私が承諾したんだな」
右手を頭にのせて首をかしげた。
「どうか、よろしくお願いします」
里子は頭を深深と下げた。
「そういうことなら、追い返す訳にもいかないだろう。こちらの方こそよろしく」
そう言うと父は庭に戻って行った。
夕食は里子が作った。サバの味噌煮、肉じゃが、ホウレンソウのおひたし、野菜炒めなどである。
父は自分で野菜サラダを作り、食用植物の花を混ぜ込んで食べている。そして焼酎のお湯割りを呑みながら
「奥さんになる里子さんは中々のべっぴんだな、その子どもさんの智子ちゃんも可愛い顔をしているね。どうだい、里子さん、お湯割りを飲まないかな」

ほろ酔いなのか頬をあかくして父は機嫌よさそうな顔をして聞いた。
「少しでもアルコールが入ると目が回ってしまう体質なんです。すみません」
里子は慶介にご飯のお代わりをわたしながら答えた。
「そうかい、慶介も一滴も飲めないんだ。私はこんなに飲むのに、酒が呑めない体質の人っているものなんだ。それにしても里子さんは料理が上手だな。こんなにたくさんのご馳走は我が家では家内が亡くなって以来だな、たくさんの人数で食べるのはいいもんだ」
父はジャガイモを頬ばりながら焼酎を呑んだ。
翌日から慶介は家事と父の面倒を里子に頼み仕事に励んだ。女が家にいるとどんなに家庭が明るくなるのかを知った。
「あなたの家の家族の一員と思っているのだけれども、わたしは、なんだかピンとこないの。居候のような感じがして。婚姻届を出せば、それもなくなり、あなたの妻という実感も湧くような気がするんだけど」
「そうかい。分かった」
二日後、仕事が終わってから、慶介と里子は婚姻届を提出する。
二週間がたった。夕食後、食器の洗い物を終えた慶介は、里子に部屋にくるように言われた。
「お父さんの面倒を看るのはかまわないんだけど、嫌なことがあるの」
顔をしかめて言った。
「嫌なことって何」
里子の顔を覗きこんだ。
「お父さんと二人だけの時に胸とか尻を触ってくるの」
「ひどいことをするな、頭に血が昇ってきたよ」
怒りを抑えて低い声を発した。
「一度、押し倒されそうになった」
少し涙ぐんでいた。
「これから父に抗議に行ってくる」
部屋のドアを荒々しく開け、父の部屋に入った。酔った父はベッドに横たわっていた。
「オヤジ、里子の身体に触っただろう。許さないぞ。今後は絶対にするな、分かっ

たか」
父の胸倉を掴んでゆする。
「何を言っている、里子の身体にさわっただと。私はそんなことは絶対にしていない。そんなことを言うのならこの家から出ていってもらおう。あの嘘つき女」
慶介の手を振り払い、ベッドから起き上がり、アルコールの臭いをふりまきながら睨みつけてきた。
「その時はオレも一緒に家をでるぞ。オヤジ独りで生活できると思っているのか。オレと里子に面倒をみてもらっているくせに」
現在の自分の状況を分かっていない父に心底、怒りを感じた。
「慶介、お前のアルバイト代で家を借りて親子三人で生活できると思っているのか。里子も職がないだろう。できるならやってみろ。私は、この家を売って介護付有料老人ホームにでも入るからな。財産はお前には残さないからな。お前は甘い」
勝ち誇ったような顔を造った。
「ともかく、里子に手をだすな。今度したら許さないからな」
認知症といえども老獪であり、自分達の現状を読まれていると思いながら父の部屋をでた。確かに家を出て親子三人で生活するにはあまりにも経済力がなかった。
部屋に戻ると
「抗議をしてきた」
父の言葉を伝えた。
「家を出ろと言われてもそれは無理」
里子は困惑の表情を隠さなかった。
「認知症だからすぐに忘れてしまうよ」
その後も父の里子に対するおさわりは続いた。そのたびに慶介は抗議したが、返ってくる言葉は、やっていない、出ていけ、であった。
日曜日の午後。智子が鼻血を出して泣きながら、慶介と里子のもとに駆け込んできた。
「どうしたの」
里子は智子の鼻にハンカチを当てた。
「庭の花を摘んだらおじいちゃんに殴られた」
「暴力は許せないわ」

里子は語気を荒げた。
慶介は庭に駆け出して行って父の胸倉を掴んだ。
「智子が花を摘んだぐらいでどうして暴力を振るうんだ。大人げ無いんじゃないか。相手は年端もいかない子どもじゃないか。注意すれば済むことだ」
殴ってやろうと思ったがとどまった。
「これらの花は私が丹精をこめて栽培しているもので、生きがいなんだ。それを踏みにじられては絶対に許せない。誰であろうと殴ってやる。覚えておけ。それがいやならこの家を出て行け」
掴まれた胸倉の手を振りほどこうとして両手に力を込めてきた。
「暴力はどんなことがあっても許さないからな、オヤジの方こそ覚えておけ」
慶介は大声で父の耳元で叫んで部屋に戻った。
智子は里子の手当てを受けて、ベッドで震えていた。
慶介は、智子と父とが顔をあわせないよう気を配った。夕食を智子の部屋に運んだ。これ以上、智子に暴力の苦しみを味あわせることはできない。
その夜、智子はうなされた。原因は父の暴力に違いない。朝食は気持ちが悪いからと食べずに学校に出かけた。胃潰瘍がぶり返すかも知れない。慶介は心配した。
夜、慶介と里子は話し合った。
「オヤジには困ったものだ、お前にはセクハラをする。智子には暴力を振るう。それが嫌だったらこの家を出て行け、遺産はやらない、という。オレはつくづくオヤジが嫌になった。オヤジがいなければ万時この家はうまくいく。オレは昔からオヤジとはウマがあわなかった。オヤジに死んでもらう方法はないものだろうか」
にがにがしげな顔で里子に言った。
里子はしばらく考えた後に
「だからといって殺すことはできないでしょう。完全犯罪なんてこの法治国家では無理でしょう。バレても罪が軽くなる方法、それってあるかも知れない。毒草よ。毒草を庭にお父さんに知られずに植えておくのよ」
思いついたようなくちぶりだ。
「毒草ってなに」
相手の顔を見つめて訊いた。
「鈴蘭、私、花屋で働いていたので知ったのだけど、鈴蘭を花瓶にさした水を誤っ

て飲んだら死んでしまった、と言う話を聞いた。詳しくは知らないが心臓に悪いらしいの。お父さん心臓悪いんでしょう」

自信を持った顔だった。これならいけるという表情が里子の顔から読み取れた。

「鈴蘭なら知っている」

「鈴蘭を買ってきて庭にお父さんに内緒で植えておくのよ。庭にある植物は数十類あるでしょう。一種類くらい混じってもお父さんは気がつかないでしょう。誤って、お父さんが採取して野菜サラダに入れて、食べて亡くなる可能性があるわ。お父さんが採取して食べるか食べないかは賭けだけど。鈴蘭はお父さんが植えたことにしましょう」

考え込んだ里子は「賭け」と再度つぶやく。

「野菜サラダに混ぜ込んで食うか食わないかは本人まかせってことかい。インターネットで鈴蘭について調べてみよう」

パソコンの電源をいれて検索した。

鈴蘭または君影草　毒草

ユリ科スズラン属　ニホンスズランとドイツスズランがあり双方とも毒草

花言葉　幸福の訪れ、幸福の再来、純潔、純愛

花期　五月から六月

毒部位　全草　花　種子　球根

毒の成分　コンバラトキシン　コンバロサイド　コンバラリン他

症状　嘔吐　頭痛　心不全　心臓麻痺

「やはり毒草でしょう」

パソコンの画面を覗き込みながら里子が声をかけてきた。

「その通り、花はこれから咲く、やってみよう」

慶介は賭けてみようと思った。現状では親子三人の生活が破たんしてしまう。路頭に迷うことにもなり兼ねない。遺産も欲しい。

鈴蘭を人知れず入手する方法を二人は検討した。

慶介はその三日後に休みを取り、一張羅のスーツに着替え、サングラスにマスクをして私鉄に三十分乗り横浜市の或る駅で降りた。行き先は前もって調べておいた

花屋である。ドイツ鈴蘭を五鉢買った。鉢を一人で長く持ち歩くのは、目撃される可能性が高くなるので危険と考えて、慶介は駅で待ち合わせていた里子に渡した。夜、父が寝てから、慶介は庭にまとめて鈴蘭を移植する。

空いている部屋の一つを里子の部屋としていた。慶介は移植から戻ってその部屋に入ると、彼女は買い物の包みを外しているのを止めた。女性用の洋服らしい。

「ストレスがたまってつい買い物をしてしまう、安物なの、フッフッフッ・・・」

仕事から帰って慶介が玄関に入った時、里子が父に暴力を受けていた。

「この泥棒女、金を五万盗んだだろう、私は見ていたんだからな」

父は里子の右腕を左手で掴み右手で彼女の左頬を平手で打った。父は、目を見開いて怒りに満ちた顔つきだった。

「私はお金なんて盗っていません。身体検査でもなんでもしてください。何かの間違いなんだから」

父の左手を振りほどこうと必死だ。

右手がまた里子の頬に飛んだ。鼻血がしたたり落ちた。

慶介は二人の中に割って入って、父の左手を里子の腕から引き離し、頬をげんこつで殴りつけて突き飛ばした。

「里子はそんなことをする人間じゃない。勘違いだろう。暴力は絶対に許さない」

父が向ってきたらもっと殴ってやろう、と右手でげんこつを作り、左手を腰に当てて慶介は身構えた。

「この性悪女、許さないぞ。慶介、お前は騙されている。わたしはまだ人を見る目は確かだ。全くの痴呆じゃない、それで苦しんでいる」

父は立ち上がりながら里子の顔を睨んだ。

慶介の怒りが本気であるのを見てとった父は、後ずさりしながら居間から去って行く。

「暴力なんか振るって許さないのはわたしの方だ」

涙ながらの激怒の目付きで、里子は父の背中に言葉を投げた。

鈴蘭が咲き始めた。

父は一向に鈴蘭のことを話題にしなかったし、採取もしなかった。花期が終わろう

としていた。賭けは失敗に終わるのだろうか。
その夜の営みで里子はいつになく燃えた。
「人生って先のことは分からないでしょう。私に万一のことがあったら、智子の面倒をみてね。あの子はあなたになついていて本当の父親のように思っているから」
喘ぎながら言って慶介の胸に顔をうずめた。
「万一って何のこと」
「例えば、交通事故で私がいなくなってしまうこともあるでしょう。そういうこと。あなたには遺産があるから」
喘ぎはなくなっていた。
「万一と言うことならばオレにも同じことは言えるだろう。遺産のことはどうなるかわからないよ」
里子を抱きしめた。
「それはそうよ。愛している。わたしは愛する人のためなら・・・」
二人はそのまま眠りに入った。
その翌日、夕食を終えた時に父が胸に手を当て苦しみ始めた。慶介も里子も瞠目して救急車を呼んだ。父は搬送先の病院の医師の必死の治療の甲斐もなく死亡した。
診断書は心不全であった。

翌朝、慶介は庭の鈴蘭が植えてある場所に行ってみた。鈴蘭の花は全て摘み取られていた。昨夕はこぬか雨だったので鈴蘭の傍に靴跡が残っていた。その靴跡は大きさから見て父でもなく、自分のものではなかった。